

オンの才人  
オフの達人

# 「深く音楽を見つめたい」 激烈なNYから八ヶ岳へ

ピアニスト 田崎悦子さん



10代から30年間はニューヨーク、現在は八ヶ岳を拠点に活動する田崎さん。20世紀を代表する指揮者の一人、ゲオルク・ショルティに抜擢され、1979年から数回、当時世界最高峰と言われたシカゴ交響楽団とソリストとして共演した。12日には、全6回シリーズのコンサート「ピアノ大全集」の第3夜を東京文化会館で開く。

6000人から選ばれ  
シカゴ響とデビュー

6歳でピアノを始めました。小学3年まで自宅にピアノがなく、ティブルに絵を描いて弾くまねをしていました。それがすくましく、音のイマジネーションが出来たのかも知れません。でも、小学6年で全国学生コンクールで優勝しました。

フルブライト給費生としてジュリアード音楽院（ニューヨーク）に留学し、卒業後はオーディションがあれば必ず受け、ロックフェラー財団など様々な奨学金を得て勉強と生活が続けました。「受からなければ明日から食べていけない」という生活でしたがそれがチャレンジになり、力になったと思います。

本当に「音楽家になろう」と思ったのは、イタリヤのフツニ国際コンクールがきっかけです。私は民家にホームステイし、その一家と指がガサガサになるまでキノコ狩りを楽しみ、それでも入賞しました。でも、世界から集まった参加者のコンクールにける覚悟を目の当たりにして、目が覚めました。「あんなに一生懸命やっても落ちてしまう人たちがいるのに……」

その後、建国200年祭で「アメリカを代表する10人の若手ピアニスト」に選ばれました。このころはも

う「アメリカ人ピアニスト」と思われていたんです。さらに、シカゴ交響楽団常任指揮者だったショルティに600人の中からオーディションで選ばれ、彼の定期演奏会をさせてもらいました。他のたぐさんのコンサートがこれに続きまして。ショルティは、ほとんどの人が難しく弾かない「バルトークのピアノコンチェルト第2番」を、私が「弾きたい」というとすぐOKしてくださった。このデビューは、信じられない、奇跡的なことでした。

オフは「人間をする」  
その中に音楽がある

ニューヨークはどの分野も世界中のベストの人々が集まり、競い合っています。そんな中で挫折感も味わいました。「これが私の求めていた音楽の世界？」と悩み、ピアノをやめようかと思いつめたことさえあります。「競い合うのではなく、もっと深く音楽を見つめていきたい」と美しいスイスの山中に2年ほど住み、八ヶ岳（山梨県）にも同じような気持ちで住み始めました。気がついていたら、日本を飛び出してから30年がたっていました。

オフというのは、突き詰めると「人間をする」ことだと思うんです。私の場合、オフの中にオンがあるんです。「人間をする」ことが第一。でなければ、音楽は感動を与えない。八ヶ岳の家も自分で設計しました。40畳のリビングの端にキッチン、もう一方の端にピアノがあり、ピアノを弾いていると視線の先に南アルプスがあります。鳥が飛び、せみが鳴く。季節を見ながら、感じながらベーターベンを弾く。

現在続けているコンサートも、実はオフから生まれたんです。本当にほれ込んだ曲、その時々命がけで愛した曲だけを書き出してみたら、バッハから現代まで全部ありました。それを「オール好きな曲」として並べたらどうなるんでしょうかと、ふさげながらプログラムしているうちに、だんだん現実化していった。この曲たちと昔の恋人に再会する気持ちで毎日向かい合っています。新発見がありそうで、どきどきしながら。若い時に死ぬ思いでした恋を思い出しますが、当時の気持ちより音楽の方がうんと強いですね。（談）

たざき・えつこ さん  
東京生まれ。1970年のヨーロッパ・デビュー後、72年にはカーネギーホールでニューヨーク・デビュー。ショルティ、サヴァリッシュ、スラットキン、小澤征爾など世界第一線の指揮者たちと共演。桐朋学園大学音楽部および大学院特任教授。

田崎悦子ピアノ大全集第3夜「ドイツロマン」  
12日午後7時から東京文化会館小ホール。プログラム「6つの小品」、シューマン「ダヴィッド同盟舞曲集」「クライスレリアーナ」を演奏。問い合わせは☎03・3235・3777へ。